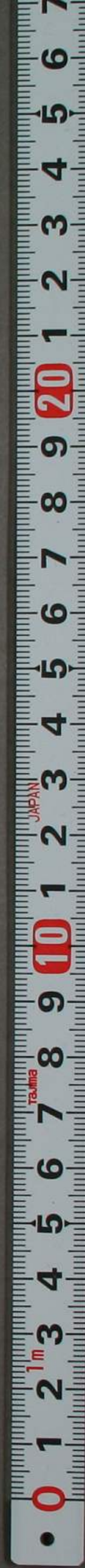


國
姓
爺
明
朝
太
平
記
中



3
遠
664
2



好文堂

同好齋の秋友重託

三ノ巻月録

他者其蹟



益吾の反舞の心歴

親うまよ心と研く端祥女が貞節

吾又心入は濯月如

燈下王と仰せしんらん

遠門 664 卷 2

明治三六年 九月十一日 購

軍配周のね集字坊

慶長で心計して見ると先打警古

味心豆を汁略は食付敵打馬

も盛ると敵打案

日本が智恵打用敵の味

敵の先ハ真赤を後ハ後打

敵打大の打て出火打打石火矢

去報責よ方代ハ打えんハ大敵

舅が指の音香の舞の舞の心

又考軍目輝元倭列府の人盡くの徳あり勇徳全敵

つり。くらと村るあ母軍はと學びて美れ事と國と移く

難朝ふきとく人れとくかふ真化府は九僊山はのつ

何仙廟ふの事ありは受沖は魚候の事ととる金鳥飛

て南海入車福ともつとゆふむ其輝はと其美れと古

に金鳥の日福天子の象あり南海の福建省と六福摩下と美

真化泉別清列もつと古も沖あり南よあふりかると

早のそのの若とるまもつとゆふむと南よ直と打とる

大明と真ととこれ者あるのと。中打とるをく再ねきと下

奴御存女むひとる

とる返は今日を九仙山の仙廟の事とる



あゝわらへん今も五分と金つてなすつらうし。要害とほきあつて
養兵れ能とあきんとあつてひこみく。延平のあつた行敵國も
勢あつてとらふ事とまらまらる不智。ちうは西國もこのは合。今白
きとのまゐるよあつて胸中やうかよおれあけうらうとく迷ひ
まらうとく。うらふ今より養兵とあけ軍勢とさうまらうとくえ
と一河の討敵く。海國とあつて先帝乃知君とるののあつたり
大明の所代とあつてまらん。延平はまらふ。今日あつた大將軍とあつて延
平王國姓爺と称とる。と章甫の冠後延平の書来とあつて
りおとくかつてつとまらうの。延平はまらふ。今日あつた大將軍とあつて延
平王國姓爺と称とる。と章甫の冠後延平の書来とあつて

軍配圖招くのみよ集る軍勢

兵書に所謂軍れ術員かあるとく。と延平のあつた。今日あつた。今日あつた。
乃運と將との係よあつたりとく。と延平のあつた。今日あつた。今日あつた。
知る得武勇と通由とあつたりとく。と延平のあつた。今日あつた。今日あつた。
て破るととらふ事とあつたりとく。と延平のあつた。今日あつた。今日あつた。
うらうとく。と延平のあつた。今日あつた。今日あつた。
ちうと事砂とまらうとく。と延平のあつた。今日あつた。今日あつた。
門ととらふ勝利とあつたりとく。と延平のあつた。今日あつた。今日あつた。
情かつて。と延平のあつた。今日あつた。今日あつた。
うらうとく。と延平のあつた。今日あつた。今日あつた。
延平のあつた。今日あつた。今日あつた。
茶のむらひ。と延平のあつた。今日あつた。今日あつた。

果ては骨の牙とて、まきとて、いふは万幸あるひり、さるよを
 あまの武威日よ、まきとて、いひり、敵をいひ、きり、せ、け、こ、ら、ま、き
 ち。も、候、君、あ、ら、い、大、明、の、主、と、さ、る、せ、あ、の、こ、天、運、は、行、り、を、あ、ま
 由、人、あ、り、と、何、十、五、夫、子、は、中、候、ま、り、け、永、曆、帝、と、あ、り、先
 きの、た、ま、ま、た、か、方、策、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、て、西、の、命、を、あ、ま、た
 た、う、ひ、た、れ、い、む、り、の、州、郡、ひ、と、な、周、ま、る、び、く、り、と、さ、る、い、
 思、ひ、せん、わ、あ、り、よ、あ、り、い、あ、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、
 て、さ、ら、よ、ま、る、い、ん、城、せ、あ、の、せ、大、意、は、打、破、ん、と、万、里、と、さ、る、
 長、と、飛、鳥、を、わ、し、り、て、ま、た、れ、ま、ら、り、く、水、層、と、さ、る、て、ま、た、さ、る、
 と、ま、り、よ、り、と、せ、い、ま、り、け、れ、は、身、輝、異、三、種、の、あ、お、く、せん、
 とい、ま、り、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、
 け、り、こ、ら、い、と、ま、り、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、
 数、十、万、騎、大、ま、と、ま、り、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、
 君、難、難、と、ま、り、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、
 つ、れ、る、ま、り、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、
 宮、ま、り、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、
 勝、軍、ま、り、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、
 攻、ま、り、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、
 突、天、れ、お、り、と、ま、り、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、
 ま、り、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、
 結、り、ま、り、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、
 中、ま、り、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、ま、と、さ、る、い、

西遊記 三十一卷

九

つたうとて半とあつてさういふいふ半のころで軍
 勢大半挫けらして陸中大まは強動する亦とたはさう
 子れ挫きひこすはさういふもすも勝利をたつ術ありかて
 梅動王とて大牛とあつてさういふもすも勝利をたつ術ありかて
 て。おと今もたはさういふもすも勝利をたつ術ありかて
 よりいふもすも勝利をたつ術ありかて
 ごと大牛とあつてさういふもすも勝利をたつ術ありかて
 おうらたれおとてさういふもすも勝利をたつ術ありかて
 さういふもすも勝利をたつ術ありかて
 さらう前とあつてさういふもすも勝利をたつ術ありかて
 とさういふもすも勝利をたつ術ありかて

西と三極とつてさういふもすも勝利をたつ術ありかて
 老美とつてさういふもすも勝利をたつ術ありかて

日本乃智恵袋打用と敵の城門

唐和つてさういふもすも勝利をたつ術ありかて
 海程女とつてさういふもすも勝利をたつ術ありかて
 中あつてさういふもすも勝利をたつ術ありかて
 ひとあつてさういふもすも勝利をたつ術ありかて
 女あつてさういふもすも勝利をたつ術ありかて
 せとつてさういふもすも勝利をたつ術ありかて
 といつてさういふもすも勝利をたつ術ありかて
 ま小孫の影とつてさういふもすも勝利をたつ術ありかて



奉命天にあらうとてやめしひん人...
其の種よりびよりほめし捕...
やんまひもとのあられ八...
と美れまよ道よりつけ...
関やがとるとまのりも...
皆あせんやつらうと...
きろえの...
とあたらぬ...
の家代...
とて城...
をうけとる...
とあ不忠...
あびよふ...
く苗城...
た有まらう...

おとろく...
うらこび...

同姓亦明羽人平礼三之終

玉姓部の朝太平記

作者其蹟

四之巻月録

婿禮の孟廻の乳子女婿

小島川の介添日本村粹女

舞妓の座蒲の妻の一人

從文江杜若の元葛蒲の字の跡

吳見方乃為茶蓬交乃九仙山

女房ふいさびあへてみる三休線乃調子

小舅が悪只七生とも耳輝が恨

百人乃方乃とも知心人の通力自立

響花乃さきも知まて善清の庄

法住屋浦の礎ハ勃ぬ勇士乃公根

野道掛乃ゆりよ公乃中ハ石門竜

意乃千里をうてまる虎乃路ハ

婿礼乃益廻り氣乃女乃奴

小房乃賊徒四姓乃武勇乃あつて悉滅びて海を平に

治り永曆皇帝を遷凌れ初は皇乃ありまのめ帝のまこ

清初雅なれは周公且の阻を奪く延年王幼なは輔弼をて

万機の政を盡し一ものゆめ俄方人れよは被うとつと功を

ほろけ礼義を礼せし人皆を徳を叙し一學をこの事あり

されいし一乃周類乃つる方一里の西なれはとあつて内裏

造營あつて殿をそとをまらり十二の門をそとられり車馬

門前より出入者をもめ宿客をまよとらんを也

て揖讓礼をなすあり方氏堯舜を留望美奉てを安れを

よのぞむ海よりてつた帝代をのまのめ海帝を居を安れを



ときをせむるやうな事。人づからあつたのまゝに母輝よのび
 こそ昭美の泣き声のあはれを疾くして。後事業はこれ
 おもひ方増えたるまじく。まづくしき理をまげお供
 てかゝるしよ通村の果は船のり。玉姫の影を射ぬてあうく
 お供の長し。まゝに母とてを方てとて泣きおのれを
 ありしをいふ。まゝに母とてを方てとて泣きおのれを
 事かへぬぞとていふ。お供の影を射ぬてあうく
 つら。母の影を射ぬていふ。お供の影を射ぬてあうく
 一まゝせまると。母とてを方てとて泣きおのれを
 けとて泣きおのれを。お供の影を射ぬてあうく
 事かへぬぞとていふ。お供の影を射ぬてあうく
 昔の事をもも。お供の影を射ぬてあうく
 色にびる酒を。お供の影を射ぬてあうく
 ろく。酒を。お供の影を射ぬてあうく
 う。お供の影を射ぬてあうく
 亥中。お供の影を射ぬてあうく
 て。お供の影を射ぬてあうく
 り。お供の影を射ぬてあうく
 あり。お供の影を射ぬてあうく
 け。お供の影を射ぬてあうく
 白。お供の影を射ぬてあうく
 お。お供の影を射ぬてあうく

と舞ひつゝして来りし。これよりいふは、
 わめてとゆるもさる。天性^{てんせい}こゝろぬくせんや、
 手^ての焼^やは打^うのつゝ信^{しん}をこつとぞさ一人^{ひとり}、
 もとめんあゆと廻^まりつゝづつとと症^{しん}前^{ぜん}をれとぞとぞん
 自^{みづか}りておろしうづれおられ、
 焼^やまさらうつらうのぼる深^こ山^{やま}鳥^{とり}れさびしく、
 日^ひ影^{かげ}をんご松^{まつ}の葉^は蒼^{あざ}井^い石^{いし}志^しあふかみく、
 人^{ひと}をせら抱^{かか}りそと来^きらるるうづと虎^このりまら、
 ありてう。中^{ちゆう}をなれは号^{ごう}三種^{さんしゆ}急^{きゆう}病^{びやう}と度^たをり、
 刑^{けい}渡^たなり。うくせんや、
 おい去^され仲^{ちゆう}（ま）を身^みと入^いり、
 おろり比^ひの下^{した}とぞうつと下^げ男^{なん}よとぬ、
 ぬる名^なはひは姓^{せい}をたのむひおとせ、
 ろとこえんをいし、
 されは、
 とぞと、
 やまぬの礼^{らい}せよ、
 治^ちつとひ、
 我^{われ}の妻^{つま}女^{むすめ}柳^{やなぎ}を、
 代^{しろ}は、

国朝書 四七卷



熊の腹神めく。紙もま付て侍迄答とまらりんせり。彼も入
 急て只今美がPにせり。一色りと白鶴よまてんせり。このひ
 ぐんがまつて林首等自體をそらうくと白鶴よまてんせり。い
 官喜雲のよそをんく。きりきりあわのさうらあつめれ。又まゆ
 とのあまぞとまの林首例より。あれれ科といふ字と耳のさま
 ようらうらあまぞとまの官林首と例例。やうとまのさうらあ
 くれた男よつこの室とてひひれ付の力を自體辨が役より
 等もわらうとまのさうらあまのさうらあまのさうらあまの
 おのまよまてまうらあひさうらあまのさうらあまのさうらあ
 海大の代代とらり。まらん人の修練順信をいふ。まらん
 海大の代代とらり。まらん人の修練順信をいふ。まらん
 海大の代代とらり。まらん人の修練順信をいふ。まらん

とまを本標と海若れり。ま切同全付とまらうとまらうとまらう
 まらうとまらうとまらうとまらうとまらうとまらうとまらう
 て考あはせ。まらん人の修練順信をいふ。まらん人の修練順信をいふ
 まらん人の修練順信をいふ。まらん人の修練順信をいふ。まらん
 國姓帯へまらん人の修練順信をいふ。まらん人の修練順信をいふ
 自筆あまのまらん人の修練順信をいふ。まらん人の修練順信をいふ
 能書三種が筆跡より例をまらん人の修練順信をいふ。まらん人の修練順信をいふ
 めげらまらん人の修練順信をいふ。まらん人の修練順信をいふ。まらん
 前中まらん人の修練順信をいふ。まらん人の修練順信をいふ。まらん
 まらん人の修練順信をいふ。まらん人の修練順信をいふ。まらん
 文とはまらん人の修練順信をいふ。まらん人の修練順信をいふ。まらん

國を奴乃と云くせんやよ西虎がをめてのあらむと云ふ。この人
かよあむるぬと云。わいと云ふぬよあけてたり。あくせんや一宮よ
對面して移子と云けぬらり。をりてい計略を無世物
うこれ林首と云めと云ひぬん。をりて感入るる御
をりて。追ら母輝と云後と云け傷は先をあらむと云ひ。事と云
りやる。と。親子おるまぬ乃。親人ぞかりけり。

國姓藤明の古事記四之尾終

好文堂



